（令和6年3月31日更新）

| 科目名 | 年次 | 区分 | 開講期 | 単位 | 教区目標・GIO | DP1 | | | | DP2 | | | DP3 | | | DP4 | DP5 | DP6 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 薬剤師としての心構え | 患者・生活者本位の視点 | コミュニケーション能力 | チーム医療への参画 | 基礎的な科学力 | 薬物療法における実践的能力 | 地域の保健・医療における実践的能力 | 研究能力 | 自己研鑽 | 教育能力 | 医療・地域・職場・患者・家族の状況に応じた適切な対応を安全に行う基礎的能力 | 与えられた課題を適切に解決し、実践する能力 | チーム医療を基盤とし、最先端の物理・化学・生物・薬学の知識を活用して、様々な疾患に関する問題を解決する能力 |
| 基礎英語Ⅰ | 1 | 必修 | 前期 | 1 | ・教科書に関連したDVDや音声教材を積極的に活用し、英語を正しく聞き取る能力の育成に努める。<br>・英文を出来るだけ辞書を使わずに内容を理解しようとすることに努め、知らない語彙があっても前後関係から意味を想推するなどして概要を把握することに努める。<br>・英語によるコミュニケーションに必要な基本的語彙や語句、表現の習得を目指し、それらを用いて他者と積極的に英語によるコミュニケーションを図ろうとする態度の育成に努める。 | | | ◎ | | ○ | | | | | | | | |
| 情報科学入門 | 1 | 必修 | 前期 | 1 | 情報化社会の発展に伴い、その技術的ベースとなる情報科学の基礎的知識とその中心となるPCネットワークの使いこなしは現代社会人にとって不可欠なものである。本教科では、各種レポート作成、実習実習報告書、卒業研究での活用を念頭に、情報科学の基礎知識を身につけた上で、各種情報・データをコンピュータを使って目的に応じて自由に扱えるようになることを目的とする。そこでまず情報技術の基本知識としてのコンピューターのハードウェアとソフトウェアの動作・役割を学ぶ。次にアプリケーションとしてインターネットの仕組みと使い方、電子メールの使い方および使い方およびビジネスマナー、セキュリティ対策、ワープロソフト（ワード）による文章作成の基礎と応用、表計算ソフト（エクセル）の基礎と応用、プレゼンテーションソフト（パワーポイント）によるプレゼン資料の作成等に必要な基礎知識と技能を各回の課題を通して習得する。またデータサイエンスで活用される AI技術のベースとなる神経回路と機械学習モデルの類似性等も学ぶ。 | | | ○ | | ◎ | | | | | | | | |
| 教養化学 | 1 | 必修 | 前期 | 1.5 | 「薬」の専門家である薬剤師は、医薬品の様々な特徴を理解するために、その医薬品を化学物質として特徴づける必要がある。そのため、薬学で学ぶ内容の基盤となる科目は化学である。したがって、本教科を薬学系化学専門科目の学修を段階的に無理なく積み上げるための導入科目として設定する。<br>学習者は、物質量の概念、濃度、酸と塩基、化学平衡、酸化と還元、無機化学、有機化学の基本的な内容を理解し、これから必要となる薬学系化学専門用語の正確な把握とその的確な使用ができるよう発展的に展開する授業内容を身につけることで、医薬品を学ぶために求められる化学の基本的知識を修得する。 | | | | | ◎ | | | | | | | | |
| 教養生物学 | 1 | 必修 | 前期 | 1.5 | 6年制薬学において、生物学は、人体・疾病・薬の作用等を学び理解する上で最も重要な基礎科目である。本講義では、生物学的事象への洞察と理解を深めるために、今後履修する「機能形態学」「生化学」「細胞生物学」「分子生物学」「免疫学」をはじめとする他系薬学専門科目を修得する上で必須となる生物学の基本的な知識を修得する。 | | | | | ◎ | | | | | | | | |
| 教養物理学 | 1 | 必修 | 前期 | 1.5 | 物理学は、すべての自然科学の基礎であり、最近は技術の進歩に伴い、生命科学の分野である医学、薬学等の分野でもその重要性が増している。本講義は、薬学生が化学系科目、物理化学、機器分析学、物理薬剤学等の科目を学んでいく上で必要な物理学の基礎知識を修得することを目的とする。物体の運動と力、仕事とエネルギー、電磁気学の基本となる法則を理解し、薬学や生命科学と関連する物理学の最近のトピックスに関する知識を深める。 | | | | | ◎ | | | | | | | | |
| 基礎数学 | 1 | 必修 | 前期 | 1.5 | 薬学を学ぶ上で基礎となる数学に関する基本的知識を修得し、それを薬学領域で応用するための基本的技能を身につける。 | | | | | ◎ | | | | | | | | |
| 国語表現法 | 1 | 必修 | 前期 | 1 | 本授業は、日本語の特徴や基礎的な表現技法についての理解を深めるとともに、レポート・論文の書き方やプレゼンテーションの方法など、大学生としての学びに必要なスキルを磨き、相手や目的・場面に応じて自らの意思を言語によって適切に表現・伝達し、言語を通して相手の意思を的確に理解し得る能力の向上に資することを目的とする。 | | | ◎ | | | | | | | | | | |
| 医療と哲学 | 1 | 必修 | 前期 | 1 | 医療を担う薬学人として、豊かな人間性や広い視野・考え方を育み、薬剤師や創薬研究に対する社会のニーズや期待、また医療人としての活動や責務を理解する上でベースとなる、医療・生命科学に関する哲学的・倫理的な知識や課題について学ぶことは重要である。これまで人類は歴史の中で、「不老長寿」や「健康寿命」への思いや願いを抱きながら、病気や怪我に対するさまざまな医療行為を通じて知恵と経験を獲得してきた。本講義では、医学・薬学の歩みをたどり、各時代での医療人の哲学的な理解や生命観に対する考察を深めるとともに、現代の生命倫理・医療倫理の諸課題について考察し、自らの人生観、また薬剤師としての道徳観や倫理観の形成に資することを目標とする。 | ◎ | ○ | | | | | | | | | | | |
| 薬学概論Ⅰ | 1 | 必修 | 前期 | 1.5 | 本科目は薬学導入科目である。学習法や学ぶ姿勢に着目しながら、大学における学びの特徴を理解する。インターネットから得られる情報をはじめとする各種学習資源の利用法や注意点を、同級生と討議しながら考察する。教員、上級生、卒業生など本学の教育課程をよく知る人の体験談等を聴くことにより、積極的に大学での学びに取り組むことが自らの将来性を広げることを学ぶ。また、薬はよくなったりすると副作用もでてくるものであるが、時として害を及ぼす側面があることを学び、薬剤師は使う人に害をもたらさないように薬を適切に扱い、人々に薬を適切に扱う必要性を訴える使命があることを理解する。薬剤師の社会的使命や医療に携わる者として適切な倫理観を持つことの重要性を理解する。<br>以上の学びを通して、病める人の心を我がごとのようにとらえることができる医療人としての感性を養う。 | ◎ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | ○ | | | | | |
| 社会薬学Ⅰ | 1 | 必修 | 前期 | 1 | 社会人としてのマナーを身につけ、人をいたわり思いやる心・相手の立場に立って物事を感じる心（側隠の心）を持った心豊かな医療人となるために、コミュニケーションの基本や生命の尊さを理解し、自らの考えを述べる能力を修得する。 | ◎ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | ○ | | | | |
| 有機化学Ⅰ | 1 | 必修 | 前期 | 1.5 | 生物、薬理、衛生、さらには医療薬学を化学構造をもとに理解するために、その基礎となる分子の化学構造と立体化学に関する基本的知識を修得する。<br>これらの知識は教養化学（1年前期）、有機化学2（1年後期）、有機化学3（2年前期）、有機化学4（2年後期）とはC,H,O,N,SのD有機化学に関する基礎的知識に関する点で共通しており、医薬品化学1（3年前期）や天然物化学（3年後期）とは生体および天然物を構成する官能基の化学構造の理解という点で関連している。 | ○ | | | | ◎ | | | | | | | | |
| 機能形態学Ⅰ | 1 | 必修 | 前期 | 1.5 | 人体の各臓器や器官、組織の構造やその機能について理解することを目的とする。薬学部における機能形態学は、医薬品の作用機序を理解するうえで基礎となる学問です。薬理学、病態・薬物治療学、薬物動態学などの土台になる学問です。 | | | | | ◎ | | | | | | | | |
| 漢方入門 | 1 | 必修 | 前期 | 1 | 現代医療において漢方薬の重要性は益々高まっており、漢方薬について十分な知識を備えることも薬剤師として必要である。本教科では、学生が現代医療における漢方薬の重要性を理解し、漢方薬の歴史や基本理論について学び、学生が今後さらに漢方を学んでいくため必要とされる知識を修得する。 | | | | | | | | | | | | ◎ | |
| 介護学概論 | 1 | 必修 | 前期 | 1 | 薬剤師は病棟薬局や薬局窓口あるいは在宅医療などで多くの患者に接遇しなければならない。これらの患者を介護する基本的知識を学んでおくことは、患者から信頼を得てコミュニケーションを容易にすると共に、看護・医療スタッフとの連携を深めるのに役立つ。<br>本教科では、介護の目的と役割、介護を要する患者の身体的、精神的心理状態について理解する。さらに、介護の展開過程や介護の実際について概説する。これらの基礎知識を、薬物治療の適正化を通して、患者の安全確保のＱＯＬ（生活の質）向上に貢献できるようにする。 | | | | | | | | | | | | | ◎ |
| スポーツ薬学 | 1 | 必修 | 前期 | 1 | 近年、特に先進国では個人がスポーツや運動習慣を持つことが健康維持の為に必要となっている。<br>本講義「スポーツ薬学」では、身体活動に関する領域の解剖学、生理学の基礎的な理解と共に、人体活動時の構造的、機能的な変化について学ぶ。生命活動に関わる臓器の種類と役割を知り、その仕組みを習得する。<br>医療人として、人間の健康状態を正しく理解し、患者に的確な指導・提案を行えるよう、基礎知識を習得し、各臓器の存在意義についても考察できるようになる。さらには、本講義を通して生命とは何か、いのちの大切さを考える力を身に付ける。 | | | | | | | | | | ◎ | | | |
| 基礎薬学演習Ⅰ | 1 | 必修 | 後期 | 1 | 学習者は、1年生前期で学修した化学系分野、生物系分野の基礎的な内容の演習を実施することで知識の概念化を行い、化学および生物の基礎的な理解力を高めるとともに、薬学を学ぶ基盤領域の知識を修得する。 | ○ | | | | ◎ | | | | | | | | |
| 心理学 | 1 | 必修 | 後期 | 1 | 本講義では、心理学の種類とそれぞれの概要を理解するとともに、人の行動と心理に関する理解を深め、説明する力の向上を図ることを目的とする。 | | ◎ | ○ | | ○ | | | | | | | | |
| 基礎英語Ⅱ | 1 | 必修 | 後期 | 1 | ・教科書に関連したDVDや音声教材を積極的に活用し、英語を正しく聞き取る能力の育成に努める。<br>・英文を出来るだけ辞書を使わずに内容を理解しようとすることに努め、知らない語彙があっても前後関係から意味を想推するなどして概要を把握することに努める。<br>・英語によるコミュニケーションに必要な基本的語彙や語句、表現の習得を目指し、それらを用いて他者と積極的に英語によるコミュニケーションを図ろうとする態度の育成に努める。 | | | ◎ | | ○ | | | | | | | | |
| 薬学英語Ⅰ | 1 | 必修 | 後期 | 1 | 薬学英語は薬学準備ガイドラインに基づき、薬学的専門性と読む・書く・聞く・話すの4技能の習得が求められています。広く薬学・医学領域で扱う入門英語の習得に焦点を当てます。薬学英語Ⅰでは、人体の構造や機能および疾患に関しての読解とカルテ用語、検査用語、病患名などの医学専門用語medical Terminologyの修得 および医薬品の適正使用に向けた基本的な内容も英文で学びます。また、国際感覚とケアマインドを持った薬学生の育成を目指すために WHOや米国FDAから発せられる最新のグローバルな健康・医療などに関する情報も学びます。 | | | ◎ | | ○ | | | | | | | | |
| 情報処理演習 | 1 | 必修 | 後期 | 1 | 薬学を学ぶ学生として、また卒業後に高度情報化社会で働く社会人として、様々な情報の検索・収集・解析・加工・発信・管理など一連の有効活用する能力は不可欠なものである。本演習では、情報科学入門で学んだパソコンの基礎知識に基づき、各種の授業課題レポート作成、実習報告書作成、そして卒業研究での活用を視野に、化学系アプリケーションソフトChemDraw の使い方、インターネットによる情報収集・加工、ワープロによる様々の文章作成、バイタル情報としての脈波解析手法、プレゼンテーションソフトによる視覚効果の高いドキュメント作成およびそれらの統合の仕方などを課題を通して学ぶ。さらに、データベースの基本機能を学び、実際の医薬品データベースを使った各種検索手法を修得する。 | | | | | ◎ | | | | | | | | |
| 薬学概論Ⅱ | 1 | 必修 | 後期 | 1 | 薬学部を卒業して社会的役割を果たしている諸先輩が活躍する現場を見学するため、病院、薬局、一般企業などを訪問する。施設訪問の見聞を持ち帰り、卒業時のあるべき姿や医療機関・薬剤師が社会において果たしている役割や課題などについて同級生と意見を交換し、成果物としてまとめて発表する。<br>大学の教育活動の基本となるスポリシー（ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシー）の概念について学ぶ。本学の3ポリシーを理解したうえで、卒業時に達成されるべき要件とされるディプロマポリシーを達成した人材とはどのような人材であるのかを考察する。さらに、ディプロマポリシーを達成するために準備されている本学の学修課程（カリキュラム）の中でどのようなことを身につけるべきかをカリキュラムツリーを俯瞰しながら考察する。<br>以上の体験を通して、本学に備わっている薬学の教育課程を修めた先に、医療人として活躍する舞台が用意されていることを理解する。 | ◎ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | ○ | ○ | | | | |
| 基礎統計学 | 1 | 必修 | 後期 | 1 | 統計学の基本的知識を修得し、それらを薬学領域で応用するための基本的技能を身につける。 | | | | | ◎ | | | | | | | | |
| 有機化学Ⅱ | 1 | 必修 | 後期 | 1.5 | 生物、薬理、衛生、さらには医療薬学を化学構造をもとに理解するために、その基礎となる酸・塩基に関する基本的知識を修得する。さらに有機反応の特徴を理解し、アルケン、アルキン、ハロゲン化合物の性質と反応に関する基本的知識を修得する。<br>教養化学（1年前期）、有機化学1（1年前期）、有機化学Ⅲ（2年前期）、有機化学Ⅳ（2年後期）とは C, H, O, N, S の有機化学に関する基礎的知識に関する点で共通しており、医薬品化学Ⅰ（3年前期）や天然物化学（3年後期）とは生体および天然物を構成する官能基の化学構造の理解という点で関連している。 | | | | | ◎ | | | | | | | | |
| 薬用植物学 | 1 | 必修 | 後期 | 1 | 自然界に存在して薬として用いられる生薬を理解するために、代表的な生薬の基原植物（薬用植物）の性状・特色、含有成分、作用・臨床応用、歴史的背景などについての基本的な知識を修得する。本科目は、次学年で開講される化学系実習で五感を使って理解を深めるとともに、上位学年で開講される生薬学、本草学、漢方薬物学、天然物化学を理解する上で欠かせない講義内容と位置づけられる。 | | | | | ◎ | | | | | | | | |
| 分析化学Ⅰ | 1 | 必修 | 後期 | 1 | 1．化学物質（医薬品を含む）を適切に分析できるようになるために、物質の定性、定量に関する基本的事項を修得する。<br>2．化学物質の分析に用いる器具の使用法と得られる測定値の取り扱いに関する基本的事項を修得する。<br>3．溶液中の化学平衡に関する基本的事項を修得する。<br>4．化学物質の定性分析および定量分析に関する基本的事項を修得する。<br>本科目は1年次に履修する基礎化学講座、2年次に履修する分析化学2、薬品物理化学１、物理系実習１、4年次に履修する薬局方試験法と密接に関連している。 | | | | | ◎ | | | | | | | | |
| 機能形態学Ⅱ | 1 | 必修 | 後期 | 1.5 | 機能形態学Ⅰを基本とし、臓器や器官の複雑な臓器や器官、組織の構造やその機能について理解することを目的とする。薬学部における機能形態学は、医薬品の作用機序を理解するうえで基礎となる学問です。 | | | | | ◎ | | | | | | | | |
| 細胞生物学 | 1 | 必修 | 後期 | 1 | 細胞生物学は、生命の最小単位である細胞の構造と機能を通して生命現象を理解し解明する学問である。薬剤師を目指す上で、薬のターゲットである細胞を分子レベルで十分に理解することは必要不可欠である。本講義では、「教養生物学」で学んだ事項を基礎として、細胞の構造、細胞増殖、細胞分化、シグナル伝達、細胞死、組織構築およびがんを、分子レベルで理解・習得し、「生化学」「分子生物学」「薬理学」「病態・薬物治療学」の学習のための基礎を身につける。 | | | | | ◎ | | | | | | | | |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 生化学Ⅰ | 1 | 必修 | 後期 | 1.5 | 本教科では、生命現象を担う分子のうち、糖・タンパク質の構造、性質、機能に関する基本的事項を修得する。また酵素反応とその機動の調節機構、補酵素・ビタミンについて学ぶ。さらに、生体内のエネルギー代謝の全体像およびそこにおける糖代謝の流れを学修する。 | | | | | ◎ | | | | | | | | |
| 栄養学 | 1 | 必修 | 後期 | 1 | 個々の栄養素の消化・吸収から、体内運搬、貯蓄、代謝の流れを理解し、各栄養素が我々が生きていく上で担っている役割を理解します。また、各栄養素の不足や過剰が引き起こす健康障害リスクについて学び、栄養素の適切な摂取量について説明するための基礎を身につけます。 | | | | | ◎ | | | | | | | | |
| 伝統医薬学 | 1 | 必修 | 後期 | 1 | 医療の原点としての民族医療、薬の原点としての民族薬がある。これらは長い歴史の試練を経て伝承され、使い続けられた民族固有の伝統医学、伝統薬物である。今日代替医学と総称されている世界の主な伝統医療のうち、アーユルヴェーダ、仏教医学、ユナニ医学、ギリシャ医学、中医学、韓医学、タイ、ホメオパシーなど各国伝統医学の医療体系を知り、そこで使われる薬物、さらに疾病予防、自己治療、生活習慣病改善、傷病者生活の質改善や寄製品、食品、嗜好品への応用などを学ぶ。また民薬品開発のシーズとしての民族薬探索の方法なども含わせ修得する。本科目は、上位学年で開講される本草学、漢方薬物学、基礎漢方処方学、漢方薬効解析学、基礎漢方薬学２を理解するうえで、欠かせない講義内容と位置づけられる。 | | | | | | | | | | | | ◎ | |
| リハビリテーション概論 | 1 | 必修 | 後期 | 1 | リハビリテーションは、人口の高齢化、疾病構造の変化、医療需要の増大により、その重要性は年々増しており、医療だけでなく、保健・福祉領域における在宅介護などにおいてもその必要性は増々高まっている。薬剤師としても、その重要性と基本理念を理解しておく必要がある。<br>本教科では、リハビリテーションの概念や人の基本的生活を保障するための人権思想を、QOL 向上の観点から講述する。さらに、リハビリテーションの対象とその方法、リハビリテーションに係わる専門職種の役割と機能を知ることによって、チーム医療における薬剤師のあり方を学ぶ。 | | | | | | | | | | | | | ◎ |
| 運動と健康 | 1 | 必修 | 後期 | 1 | 健康の維持・増進・生活習慣病等の予防には、運動・休養と睡眠が不可欠であり、薬剤師にも、地域住民の健康に関する良きアドバイザーとしての働きが期待されている。本教科では、運動生理学を基礎として、様々な疾患の予防・改善と、健康の維持のために必要となる運動について理解する。 | | | | | | | | | | | ◎ | | |

**各授業科目の、各DP小項目への貢献度の総和を100としたときに**

◎　強く関わる（40以上）

○　関わる（40未満）